

8月1日「この子どもたちと」マタイ福音書5：1～12

8月の平和聖日を迎えました。8月に殊更平和を覚えるのは日本だけで、それはもちろん75年前、私たちの国が太平洋戦争へと突き進み、多くの犠牲者を出し、また国外の大勢の人たちを傷つけた歴史を覚えるためです。今日も、子どもの礼拝では教会員の方に戦火の中を逃げ惑った体験を語って頂きましたが、広島、長崎、沖縄、どこの地域でも語ることが出来る方が年々減っているというのは大きな課題です。私たちも直接話を聴ける機会を大切にしていきたいと思っています。

さて、そんな今日は、福音書からイエスの幸いの言葉を聴きました。イエスはガリラヤ湖周辺の会堂で教え、病人を癒して回りました。2000年前ですから学校に行けるのも、医者にかかれるのもほんの一握りのお金持ちだけです。誰でも無料で教え、癒してくれたイエスを周辺の人がどれほど驚いて喜んで迎え入れたか・・・すぐにうわさはガリラヤだけではなく、ありとあらゆる地域に広がり、たくさんの方が集まってきました。イエスはこの大勢の群衆のために小高い丘に登ってお話を始められました。最初に教えられたのは「幸せ」についてです。イエスは教えられます。「心の貧しい人（ボロボロに傷ついて心が沈んでいる人）は幸いである」他には「悲しむ人」「柔和な人（偉ぶらず、へりくだった人）」「義に飢え渴く人（神さまの前に正しい行いをしようとする人）」「憐れみ深い人」「心の清い人」こういった人たちを皆「幸いな人だ！」と呼びました。かなり変わっていますね。一般的な幸せ、例えば、お金持ち、子宝に恵まれる、健康で長生き、などとは異なっています。どうしてでしょうか・・・？それは彼らが「9節 平和を実現する人」だからです。

先日、児童文学作家的那須正幹（まさもと）氏の訃報があり、子どもの頃読んでいた「ズッコケ3人組」シリーズを思い出しました。彼は3歳の時に広島で原子爆弾に被爆して以来、一貫して戦争の悲惨さと平和の尊さを訴え続けて来られました。前述した教会員の方も「私が大変な空襲の中を生き延びたのは平和の大切さを語り伝えるためだ！」そうお話しされます。大きな痛みを負うような悲惨な経験というのは、平和を愛し、平和を造り上げようとする人へと変えるのだと思います。イエスの周りに来た人たちも病気に苦しみ、ボロボロに傷つき、悲しんだ人たちです。また、そういった人たちを何とか助けてあげ

ようと付き添ってきた柔和で、義に飢え渴き、憐れみ深い人たちです。これらの人たちは皆「平和を実現する人」「神の子と呼ばれる人」幸いな人たちなのです。

今日の話から、イエスの語られた幸い、平和を実現する力の一つに「他者の痛みを共感する力」があると思いました。他人の痛みが分かる人です。今、祈祷会では出エジプト記を読んでいます。20章からは物語部分が終わって、一見するとつまらない十戒や律法の戒律の部分を読んでいます。これが詳しく読むと案外面白いのです。例えばこんなものです。22章22～23節「**寄留者を虐待したり、圧迫してはならない。あなたたちはエジプトの国で寄留者であったからである。寡婦や孤児はすべて苦しめてはならない。もしあなたが彼を苦しめ、彼がわたしに向かって叫ぶ場合は、わたしは必ずその叫びを聞く**」孤児・寡婦・寄留の民、奴隷に至るまで社会の中で最も弱いこの人たちは守られなければならない。なぜか？それはイスラエルの人たちもエジプトの国で奴隷であったからです。自分たちも最も弱い立場の者たちの痛みを知っているのだから、他の人たちにそのように振舞ってはならないと教えられます。それが聖書の律法の根底の精神です。

それは幸いの言葉でいえば「7節 憐れみ深い人々は幸いである」に当たるとおもいます。「憐み」・・・普段はあまり使わない言葉です。キリスト教辞典にはこうあります。「他者の不幸な状況に共感する感受性。」辛い思いをしている人の苦しみに共感できることです。イエスは憐れみについて色々な仕方で教えられました。良きサマリア人の譬えでは、強盗に襲われた人の隣を通った3人のうち、サマリア人だけが倒れた人を見て「憐れに思った」とあります。イエスは私たちに「**行ってあなたも同じようにしなさい**」と言われます。先週もお話ししましたが、イエスは徴税人や罪人と呼ばれる人たちとも交流し、一緒に食事もしました。そのことをファリサイ派や律法学者たちなど「正しい」人たちから責められます。「なぜ徴税人や罪びとたちと食事をするのか!？」イエスは言われます。「**医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。**」

イエスは憐れみについて「行って学びなさい」と言われるのです。実際に出

会って、その人の負っている現実を知って共感すること、それが憐れみへの道だと。私が教会を通して受けてきた恵み、自分自身を形作ってきた恵みというのは、まさにそうやって行って学んでくるということだったと思います。最初に体験したのは、父に連れられて行ったホームレス支援のボランティアでした。学生の時には東日本大震災の津波の被災地に行ったり、福島放射能による健康被害を受ける子どもたちや保護者の方々と出会ったり。牧師として働き始めてからも、沖縄の基地反対運動の現場に行ったり、香港の民主化運動に参加する若者たちと出会ったり・・・私が教会を通して教えられてきた恵みとはそうやって、今苦しんでいる人たちのところへ行って出会う機会が与えられたことでした。「悲しくて悲しくてとてもやりきれない♪」という歌がありますが、そんな痛みに声が詰まり、一緒に涙が出ることでした。それはイエスが歩まれた道のほんの一部と一緒に体験することです。イエス自身もローマ帝国との戦争で傷つくガリラヤ中を回ってたくさんの人々の病や傷を癒し、愛を教えました。最後は何の罪もなかったのに、私たち一人一人の罪を負って、十字架を背負って死んでいかれます。イエスの生き方そのものが他者の痛みを深く寄り添い、共感し、神の愛を現すものでした。「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」との聖書の言葉はイエスによって実現された平和の福音だと思います。

最後に、今、平和について語るうえで外せないと思われる事柄について語ります。今からは私の良心に基づいて語ります。今、東京で平和の祭典と銘打つ大会が開かれています。私はこのオリンピックには完全に反対しています。ネットで反対の署名もしました。一切観戦はしていません。既に、この1週間で新型コロナウイルス感染症の感染が爆発的に増えています。そのことはあらかじめ予想され、危惧されていたはず。大勢の人からの大会を疑問視したり、反対する意見を全く無視して開催された大会を応援することはできません。そこでいくつメダルを獲ろうが、どれほど感動が巻き起ころうが、「平和の祭典」の名の下に何万人もの人たちの命が危険にさらされていること、中には重い後遺症を負ったり命を落とす人がいること、感染拡大が長引けば仕事を失い、路頭に迷う人が大勢出ることを見ると、すべてのメダルが血塗られているように私には見えます。エレミヤの預言です。「**6：13～14 身分の低い者から高い者に至るまで／皆、利をむさぼり／預言者か**

ら祭司に至るまで皆、欺く。彼らは、わが民の破滅を手軽に治療して／平和がないのに、『平和、平和』と言う。」特定の利権を持つ人たちが潤うために行われた「平和の祭典」オリンピックによって日本中がコロナ禍に巻き込まれようとしている状況を思うときに、人間は歴史から何も学んでいないと思わされます。

私たち日本基督教団には「第二次世界大戦下における戦争責任の告白」というものがあります。一部引用します。

「世の光」「地の塩」である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした。まさに国を愛する故にこそ、キリスト者の良心的判断によって、祖国の歩みに対し正しい判断をなすべきでありました。しかるにわたくしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを、内外にむかって声明いたしました。

まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました。わたくしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞にこころからのゆるしを請う次第であります。

教会には神様から託された地の塩、世の光の使命があります。反対すべき時に反対しなければそこには重い責任があります。コロナ禍が長引けば最も被害を受けるのは、精神面や体調に不安を抱える人、雇用の不安定な人、医療や福祉などで社会を根底で支える人、この社会で最も弱い立場にある人だということとは忘れてはならないと思います。

8月は平和聖日だけでなく「このこどもたちが」の讃美歌を何度も歌うことにしました。平和と子どもたちは切っても切れない関係にあります。私たちが子どもたちに将来どのような社会を残せるか・・・今を生きる私たちの課題ではないでしょうか？次の世代へと残す社会が願わくば弱いものを切り捨て、一部の利権を得る強い者たちの意見だけが通るものではないことを祈ります。願わくば、憐み深く、社会の中の最も小さな人が希望をもって生きていける世界となることを祈ります。「平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」